

4月17日に、本校6年生35名を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」について、結果がまとめました。本調査は、国語・算数・理科の3教科のテストと同時に、家庭での過ごし方や学習時間と聞く調査も実施されており、生活習慣と学力の関係など、本校の子どもたちの状況をお伝えします。

総合結果（国語・算数・理科）

3教科とも、正答率が全国平均・京都市平均を上回り、本校児童は確実に学力を伸ばしていると考えられます。それぞれの教科を内容・設問別に見てみても、ほとんどの設問で全国平均・京都市平均を大きく上回っており、5年生までの学習内容が充分に定着している様子が伺えました。

国語科より

成果が見られた点

- 「目的を問う読解問題」では、全国平均を大きく上回る正答率(93.8%)を記録しました。
- 図と文章の説明の意図を問う問題でも、全国平均より高い正答率を示しており、作者の意図を読み取る力が育まれています。

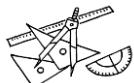
課題と今後の取組

- 話し合いの発言の意図を問う問題では、誤答の選択肢が多く、読解の精度にばらつきが見られました。
- 複数資料を根拠に自分の考えをまとめる記述問題では、論理的な記述力の向上が今後の課題です。

算数科より

成果が見られた点

- 必要な情報を選ぶ問題では、非常に高い正答率(96.9%)を記録し、必要な情報を取捨選択する力が高いことが分かりました。
- 分数計算の問題でも安定した計算力が見られました。



課題と今後の取組

- 記述式の問題では、求め方を式や言葉を用いて記述することに課題が見られました。
- 図形の分割と面積計算の応用問題では、応用力の育成が必要です。

児童質問紙から見える傾向

理科より

成果が見られた点

- 実験条件の記述問題では、全国平均を大きく上回る正答率を示し、実験の理解が深まっています。
- 受粉に関する知識を問う問題でも高い正答率を記録し、基礎知識の定着が確認されました。

課題と今後の取組

- 電気回路の理解に課題があり、1月の電気の単元で再確認する必要があります。
- 水の温度による体積変化の理解では誤答も一定数あり、間違えて覚えている児童がいることが伺えます。

学習意欲・自己認識について

- 将来の夢や目標をもっている児童が多く、自己肯定感も高い傾向です。
- 授業を楽しいと感じている児童が多く、学習に前向きな姿勢が見られます。

家庭学習・ICT活用について

- 平日・休日ともに家庭学習時間が全国平均を上回っており、学習習慣が定着しています。
- ICT機器の活用も積極的で、情報収集やプレゼンテーションなどのスキルが高いです。

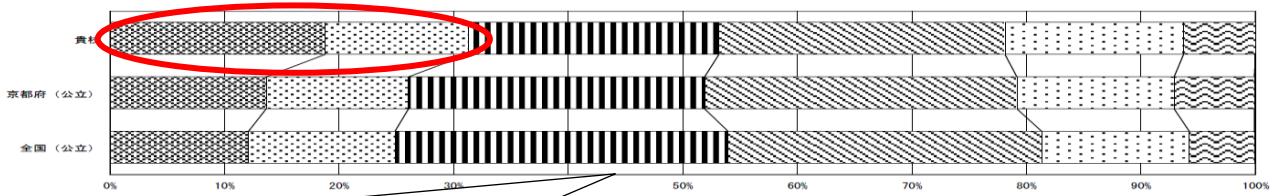
教科別意識について

- 国語・算数・理科ともに得意・好きと答えた児童は全国平均より多く、授業理解度も高いです。

児童質問紙調査から①

□1. 3時間以上 □2. 2時間以上、3時間より少ない □3. 1時間以上、2時間より少ない
□4. 30分以上、1時間より少ない □5. 30分より少ない □6. 全くしない

Q 学校の授業時間以外に、普段(月～金)、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしていますか(塾含む)

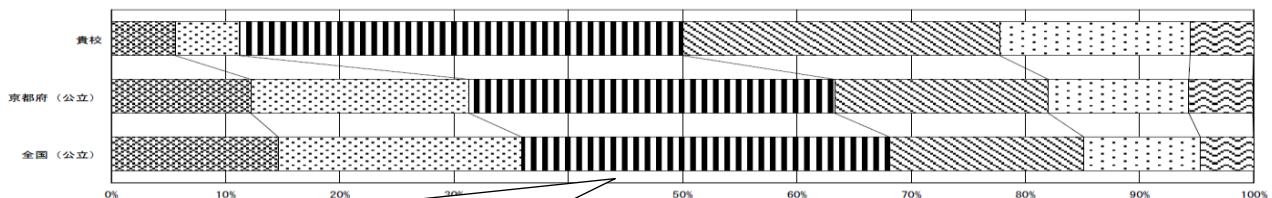


「3時間以上」「2時間以上、3時間より少ない」と答えた本校児童の割合は、全国平均と比べていずれも上回っており、家庭学習に時間をかけている様子が伺えます。学力(正答率)との相関関係で見ますと、それぞれの項目間では、正答率(3教科合計)で4~8ポイント程の差がついており、時間が長いほど得点が高い傾向が見られました。

児童質問紙調査から②

□1. 0～10冊 □2. 11～25冊 □3. 26～100冊
□4. 101～200冊 □5. 201～500冊 □6. 501冊以上

Q あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか(雑誌、新聞、教科書は除く)



家庭にある本の冊数が多い児童ほど、国語・理科を中心に学力(正答率)が高い傾向が見られました。特に国語の記述力や読解力において、本の冊数との相関が強く、読書習慣が文章理解力の向上に寄与している可能性があります。算数・理科でも、記述式問題での得点が高く、論理的思考力や説明力に影響していると考えられます。読書に親しむ習慣は身につけるにあたって、手にとれるところに本があることは有効です。ぜひ子どもの身の回りに本を!

学力と児童質問紙の相関傾向

今回の調査結果をもとに、学力と学習意欲・生活習慣との関係について分析したところ、以下の傾向が見られました。国語・算数・理科で高得点を取った児童は、「授業が楽しい」「自分の考えを発表するのが好き」と回答した子が多く、「ICT機器を使って学習できる」「友達と協力して学習できる」と肯定的。学習に対する前向きな姿勢とICT活用力が高い傾向が見られました。一方で得点が平均以下の児童では、「授業が楽しい」「自分のよいところがある」と感じている割合がやや低く、「家庭学習時間が短い」「ICT機器の活用に自信がない」という回答が目立ちます。学力が伸び悩む児童は、自己肯定感や学習習慣、ICT活用に課題がある可能性があります。京都市では二学期より新たにiPadを導入し、ICT活用に取り組んでいます。本校でも様々な実践を重ねながら、引き続き活用を推進していきます。

保護者の皆様へ

全国調査は、子どもたちの学習状況を知り、子どもたちの可能性を更に伸ばしたり、課題を解決していくためのものです。結果が学力のすべてを表しているのではなく、順位を競うものではありません。

学力は、学校・家庭・地域での地道な積み重ねにより定着していくものであり、望ましい生活習慣や日々の学習習慣がその基盤となります。今回の本校の結果をみると、学力は着実に定着しており、ご家庭での子どもに対する積極的なかかわりや指導・支援の成果が表れています。引き続き、子どもたちの健やかな育ちと学びの環境づくりにご協力をお願いいたします。

